

日本文化と禅

両忘庵釈宗活老師の短歌（二）

『六道游戲集』より

……………堀井 妙泉

耕雲庵老師親交の

碧雲居先生（一）

……………河本 祖舟



両忘庵釈宗活老師の短歌（二）

『六道^{ゆげ}游戲集』より

堀井 妙泉

惜しみつつなを過やすく月と日はげにもひまゆく
駒のあしなみ

（折にふれて、七十三翁）

一刻の時間も惜しみ、制作三昧に明け暮れしていると、月日は過ぎやすく、まるで駒の駆けてゆくあしなみのようだと詠まれています。何もせず退屈な生活は一日が長く感じられますが、何かに没頭している時は、時間の経つのも忘れ、ふと気がついたら夕方になっていたりします。月日の経つのは「光陰矢の如し」とよく言われますが、ここでは「駒のあしなみ」と表現したところに特色があります。草原を自在に駆けまわる馬のたてがみが風に靡くさまや、蹄のリズムのある音が聴こえてくるようです。生命の躍動を把握し、今を生き活きと生きることを表していますが、作者の内面が大きく反映されていると思います。ふと思い出したのですが、『両忘老師龜鑑』のなかに【功夫は須く頭燃を救うが如く急切なるべし。精神を奮起して、片時も放遅すること莫れ、無理会の処に向かつて、究め来たり、究め去り、究め究めて止まざれば、心華^{しんげ}發明して十方刹^{せつ}を照さん】という一節があります。未熟なわたしにはとてもその真意の深さには、届きませんが、生きてゆく途中で何度か絶望に落ちて、心身が虚脱状態の時など、ヤケにならず趣味でもよく、坐禅でもよく、自分の出来ることに向かっ

て工夫し、没入してゆけば「頭燃を救うが如く」つまり自分の中で頭をもたげている貪・嗔・痴とん じん ちが消えて自身を救うことが出来る。また、精神を奮起して、片時も自分を粗末にはいけない。不可能のところへ向かって、究め究めて止まざれば、やがて心中が花の咲いたように明るくなり、まわりのものも暖かく包むことが出来るものだと理解し、この一節を反芻はんすうし、日々を過ごしております。

色も香も妙なる梅のゆかしさに幾夜寝さめぬ草の庵に
(昭和一七年春、七十三翁)

淡紅の色といい、香りといい何とも言いようのないほど優れていながら、控え目に馥郁ふくいくと咲いている梅の花を思い、幾夜も草庵に目が覚めてしまうと詠まれていました。「妙なる梅」を禅の境地として味わうことも出来ませんが、ここでは芸境として鑑賞してみたいと思います。

長い間の風雪に耐え、己を究め、究め尽くして芸道おうしも奥旨に到り、意識することもなくほのぼのと匂い出るだけで、外からは見えないが、無上の芸境につき動かされて、幾夜も幾夜も目が覚めてしまうと鑑賞しました。

もうひとつ艶っぽい解釈も出来ると思います。それは「妙なる」と「ゆかしさ」というフレーズから想像されるもので、古い道歌に 妙わかの字は少き女の乱れ髪結むすぶに結はれず解とくに解かれず の歌から連想されるものであります。お色気もあり品もよく容姿端麗ひとな女から滲み出る香りが、なんとも言いようのないほど優れて一輪の梅花のようだ、その女人を懐かしく思い出されて幾夜も目が覚めてしまうという解釈も出来ます。「ゆかしさ」は何となく慕わしく、思い出されて懐かしむという意味もありますので、いろいろとイメージのふくらむ歌であります。

あら笑止よたか鳴きつる聲ききてほととぎすぞとめづる人々
 (世の人夜鷹の聲ききてほととぎすと思ひたる人多ければ)

「あら笑止」は軽妙な初句ですが、なかなかに凄味が利いています。馬鹿らしくて吹き出したくなる^{ころ}ところを怯えている様子が見えるようです。世の人々は、本物も贋物も見分けがつかず、贋物を本物と違って珍重しておるワイ、と解釈いたしました。

夜鷹はめったに見る事は出来ませんが、カラス位の大きさに全身灰褐色、口は大きく昼間は樹の枝か大地に眠り、夕刻から活動をはじめて、飛びながら昆虫などを捕食して生きています。鳴き声は「キョッ・キョッ」と短くかん高く、私も札幌の円山に住んでいる頃、なん度か聞いたことがあります。

ほととぎすは札幌道場のまわりでもよく聞きますが「てっぺんかけたか」「ほっちゃんかけたか」と鳴き、夜も昼も飛びながら虫を捕食しているようです。どちらも姿かたちや習性が似ているので、間違う人がいるのですが、この歌から凄味を感じた詳細をもう少し加えますと、禅の修行は凡夫が修行に修行を重ね、究極は凡夫に帰ることではありますが、凡夫といってもただの素凡夫ではないのです。例えば高く険しい山巔^{てん}を究めて下山している人と、未だ山に登らないでまごついている人とは、見た目は同じように見えるが、比較にならないものがあります。世の人々は本物も贋物もわからず、にせ物を珍重していることの多いものだ^と苦笑いしている作者の表情が見えて参ります。

真白こそふじのすがたときくものをなと黒妙と
 かはりはてぬる

(五十年後の人に代わりてよめる)

これは富士山の歌で簡潔な表現ではありますが、とても奥の深い意味が含まれています。この歌の詠まれたのは、昭和17年ですから日中戦

争から大東亜戦争へなだれこみ、昭和20年8月には、広島、長崎にアメリカの空襲によって原子爆弾が投下され、人類史上かつてない大惨事がもたらされ、街も人々も真黒焦げになりました。日本本土の大都市も空襲により瓦礫の荒野となった、大変な時代でありました。この歌は先の見えない真暗な時代を背景にして、更に50年後の未来の日本の相^{すがた}を遠心的な視野に入れて詠まれています。

真白く汚れない堂々とした富士の姿こそあるべき自然の相でありましょうに、「など」何故に「黒妙」と、真黒い富士とかわり果ててしまったのか、と吐露されています。富士はもちろん日本の国を象徴していると思います。正しく、仲よく、楽しくの世界楽土からほど遠く、戦争という人間の狂気に押し流されてゆく国全体の荒廃を憂い、高踏的な批判ではなく、肚の底から^{つぶや} 呟くような痛みが伝わって参ります。

佐保姫の白妙ころもいつしかにけぶりにくろむ墨染のふじ

(同じところに)

これも、五十年後の日本の未来の世相を憂えての歌であります。佐保姫とは春をつかさどる女神のことですが、青年期や思春期のことであり、人生で一番晴れやかな時期に身につける「白妙ころも」、純粋な学究や趣味など、美しい夢が沢山あります。それがいつしか無惨に破れ、先の見えない日本になっていると詠嘆されております。

思えば当時の兵役法では満20歳に達する男子が徴兵適齢者として、戦地に送られましたが、戦争の深刻化につれて、18歳から19歳の学生たちまで、予科練として戦闘機搭乗員養成制度の公布によって、航空隊に入隊し、茨城県土浦の霞ヶ浦航空隊の基地から、また鹿児島県川辺郡の知賢特攻隊基地からと、沢山の若い学徒たちが小さな戦闘機に乗り、敵艦に体当たりで散っていったのであります。未来性のある若い優秀な命たちを「佐保姫の白妙のころも」と比喻された切り口の鋭

さに驚きます。更に「墨染のふじ」にも、どきりと致します。現代の世相を見ましても、敗戦を境に日本古来の美しい心が失われ、間違った自由主義がはびこり、自分さえ良ければ良いという狭い個人主義や、人間形成の未熟さゆえに起こる殺人、自殺など後を断ちません。また科学の発展にともない人間の命を軽視することの危険性を示唆された歌と思います。

この度、両忘庵老師の歌の一部に触れてつくづく思いましたことの一つは、生きた真の禅とは凄そうに見えないで凄いものだと思います。難しい歌はやさしく。易しいことを深く。深いことを愉快地。愉快なことを真面目に書くことを教わりました。文化的創造にしても、禅の三昧力は豊かな源泉であり、^か涸れることのない清らかな泉のようであり、その中から生まれた作品は、自分の渴望を癒し、他者の渴望をいやし得る沃野となるのではないかと思いました。

もう一つは、名人とは定石の壁を破って格式から出た人であり「愚の如く魯の如し」で一見素人のように見えますが、素人くさい稚拙の中に、他の追随を許さない非凡さを持ち、自由無礙の天地に躍り出したところから、天衣無縫の名人芸が生まれるのではないかと思いました。私も歌人と呼ばれることが許されるならば、機に応じ、縁にふれて無雑作な働きの出来る游戲三昧に近づくよう精進して参りたいと希っております。

偏見と独断の解釈で、間違いが多々あることと思いますが、皆様からご教導をいただきますようお願い致しまして、終わりたいと思いません。

(平成22年6月26日、禅フロンティアの講話より)

著者プロフィール

本号5頁参照。